保育にあたって考えさせられたこと

＝発達とともに生ずる問題行動＝

吉田三紀子

毎年のことながら、四月がきてまず感じることは子どもたちがひとまわり小さくなったということである。三月に卒園した子どもたちに比べて、新しい年長組の子どもたちはまだ幼く、果して一年の間に卒園児らしく、しっかりした子どもになれるのかしらといつも思うのである。まして三才で入園してくる子どもたちはまだ赤ちゃんらしいところが多分に残っていて、話しかけたり手をつないだりするのが何だかこわいような気持にさえなる。しかし彼らは一日一日成長し、変化し、入園当初の私共の心配などすぐに忘れさせてしまう。夏がすぎ秋がきて運動会、お遊戯会などの行事に追われている間に自然は急速に移り変っていってしまうが、幼児の成長発達の変化はそれ以上にまた急速度である。

幼児期は身体的にも精神的にも成長発達の著しい時であり重要な時期である　この重要な時期を一年、二年或いはそれ以上の長い期間を保育者は彼らと生活を共にするのである。保育所の場合職業をもつ母親が増したせいか四年五年と登園するものも珍らしくないが、幼稚園においても最近は保育期間延長の傾向があるようである。新聞テレビ雑誌に幼児教育の重要性が盛んに述べられ、幼児教育についての知識が目や耳からいやでも入ってくる。それと同時に音楽、バレー、絵画、書道などの特別指導が盛んになり、それらと同じような意味で少しでも早く幼稚園に入れたいと願う人たちが多いのではないだろうか　したがって幼稚園教育の内容も幼稚園本来のありかたではものたりなく、小学校教育の領域をおかしてくれるような幼稚園に人気があるようである。蛇足ながら、そういう人たちの願いをかなえてくれる幼稚園が多いことも事実である。しかしまた、一方には、有名小学校への入学準備教育に重点をおく幼稚園に反感をもつ父兄もあり二年も三年

も登園させたくないという意見もある。また、長く登園していると幼稚園にあきてしまい無気力になる、などの理由で一年保育がいいという考えもある　保育者の方にも、長く登園する子どもはよくボスになったり、逆に無気力になるという悩みもある　ともかく花園期間について現在多くの問題があるが、これらは花園期間の長短で解決のつく問題ではなさそうである　もっと根本的なところに考えねはならない点があるのではないだろうか。幼児教育の重要性があらゆる機会にさけばれ世の中が幼児教育に関心をもってきたことは事実であり、好ましいことである　そういう時代に我々保育者の考えねばならないことは幼稚園、保育所での幼児教育のありかたである。そしてもっとも重要なことは幼児自身を大切にすることである。これは当然のことでありながら案外ないがしろにされているのではないだろうか。

我々は幼児期の教育の重要性についてもう一度考えてみなければならないと思う。幼児教育の理論がそれぞれの学的分野において著しく発達し、マスコミなどの影響でその分化された一面が極度に表面化されはじめた。たとえば幼児の音楽、幼児の絵画、幼児の問題的行動といった具合にその一つ一つが掘りさげられ理論づけられ、雑誌、テレビ、新聞にとりあげられている。したがってそれを見る人たちはそれらをハラハラに理解し生のままの理論をのみ込んでしまいがちである　しかしこれらの表面化された問題は身心ともに円満な社会の一員としての人間形成に必要な一要素であり、特殊教育を目的としたものではない　それらがうまく重なり合ってはじめて一つの円満な人格が形成されるのではないだろうか　特に幼児期は脳のはたらきの面からみてもそれぞれの機能がいかにからみあうかの重要な時期といえる。

この重要な時期に、しかも長くなりつつある花園期間を保育者はどのような考え、どのような態度で保育すればいいか、これは、たいへんな難問である。しかしその根本になる考え、態度は結局一つであり、それは次のようなことではないだろうか。幼児教育についての知識は豊富でなければならないが、それ以上に必要なのは幼児を知るということである。幼児の自然な姿を知ることは簡単なことではない。目の前に遊ぶ子どもたちはさまざまな環境の中で生まれ、育ちつつある人間である。一時もじっとしてはいない。身心ともに常に成長発達の途上で変化しつつある。だから、保育者は目の前の幼児の観察を怠ってはならず、自分の目で幼児をよくみることがもっとも大切だということを認識すべきであると思う。

夏休みが明けて、久し振りに登園してきた子どもたちをみながら「○○ちゃん、急に大きくなったわね」と私たちはしばしば話し合ったものである。それ位幼児は目にみえて大きくなるが、いろいろな研究調査によって明らかにされている通り身心の発達の顕著なことが示されている。

例えば神経組織中の最高の中枢である脳の重量の発育状態を調べた研究によれば、六—七才までに約70％は発育してしまい、その後はゆるやかな発育状態を示している。またそのはたらきの面からいっても三才、五、六才が非常に重要な時期にあたる。運動についても全身運動がしっかりしてくる上に、手先の機能もこの頃からだんだん進歩してくるようである。彼らの行動には、これらの事実がはっきり表われ、遊びかた、選ぶ遊具などから彼らの成長発達ぶりを察することができる。

幼児期において身体的発達と共に知識的な面で語彙の増加の著しいことが久保良英氏の研究によって明らかにされている。それによれば、三—四才の間に増加率はもっとも高く、四—五才、五—六才がそれに次いでいる。私も以前幼児をみていて幼児と動物との関係が非常に密接なことを感じいろいろ調査を試みた。その結果は本誌に報告したとおりであるが、その中で幼児はどの程度動物名を知っているか調べたものがある。それによれば幼児の動物名正解率は年令が増すにしたがって高くなることが明らかになった。とくに正解率の増し方は三—四才の間においてもっとも急激であり、四—五才、五—六才がそれに次いでいた。幼児の成長発達がいかに顕著なものであるか、これらのほんの一例からも察することができる。

幼児期において、幼児の成長発達の過程としてもっとも重要なことは、彼らが家族という集団から外に一歩ふみだしたことであろう。家庭の中で母親を相手に遊んでいた子どもたちも家の外に目をむけ、お隣りの○○ちゃんからはじまり、やがては近所に幾人か仲間ができるようになる。けんかも盛んになるが母親の相手よりも子ども同志の遊びは次から次へと発展し、外で過ごす時間もだんだん長くなる。すなわち彼らは家族集団の中で生まれ、育ち、やがて近所集団にも属するようになる。そして幼稚園・保育所に登園するようになれば更に園児として、すなわち施設を単位としてできる集団に属するようになる。

家族集団はいうまでもなく、親、兄弟、姉妹などの人たちによ

って構成されるものであるが、その内容はそれぞれ異る。末っ子、ひとりっ子、おばあさんっ子といろいろ問題にされているように、家族集団の内部組成は彼らにとってもっとも身近かなものであるだけに毎日の生活に影響大なるものがあるのはいうまでもない。やがて子どもたちは近所集団に属するようになるが、近所集団とは、いわゆるお隣りの家族、同じアパートの家族といったような人たちの中にできた集団であるが、遊ぶ場所、道などが共通であることから結びついたものが多い。家庭から出て遊ぶ時間がだんだん長くなり「ごはんになっても帰らない」などとよく耳にするが、やがて幼稚園、保育所に通うような頃になると、通園の道に近所友だちがあるというのは彼らにとって非常に心強いものであろう。登園時にみられる幼児の集団組成を調べてみると、近所関係及び家族関係（きょうだい）によって結びついているものが殆んどである。したがって男女混合の両性集団が多い。しかし登園になれてくると、幼稚園で知りあった友だちを遠くまで誘い、まわり道をしても男は男同志で登園する子どももある。さて幼稚園の内部でみられるすなわち在園時集団についてながめてみよう。入園当初は母親から離れてひとりで始めて入った大きな社会であるから、なかなか自由な行動はとれない。きょうだい或いは一しょに登園した近所友だちなどで遊ぶのがせいいっぱいである。しかし他の子どもたちに無関心なわけではなく「幼稚園に髪の長い可愛いい女の子がいたよ」とか「いじわるそうな男の子が先生にしかられた」などと帰宅して家族に報告する。そして同じテーブルに座ったとか、遊具や保母が媒介となって同じ遊びをしたとか、いろいろの機会で一しょに遊べる友だちを彼ら自身でみつけるようになる。このようにしてできた在園時の集団組成を調べてみると、登園時とは逆に近所関係による結びつきは減り、友人関係による結びつきが増してその殆んどを占めている。したがって性的組成からみると在園時集団は同性集団が非常に多い。

こうして彼らはだんだんとその行動範囲をひろげ、属する集団もいろいろな内容のものになる。と同時にこれだけたくさんの子どもたちが一しょに遊ぶのだから、さぞけんかが増すだろうと思いがちであるが、しかし実際には、いじめられるという一方的な争いはよくあっても、双方ゆずらずといったけんかはそれほどない。何故だろうか、との疑問から私は幼児の集団内部の構造を調べてみた。一台しかない三輪車で表面的争いもなく遊んでいる子どもたちを毎日ながめていて次のようなことがわかった。三輪車を使用する子どもたちは大体十数人であったが、引っ張り合って争ったことは殆んどない。それはその十数人が優劣関係によって順位づけられているからである。第二位の子どもは自分より上位

の子どもが近つくと多少なごりおしそうな表情をしながらも自分からすすんで三輪車をゆずり渡す。自分より下位の子どもがいくら三輪車を使いたそうにしたところで、それにはいっこうお構いない　したがって最下位に近い子どもたちは三輪車が飽きのため放り出された町以外殆んど使える時はない　しかし時には最下位の子どもでありながら上位の子どもをしりめに、ゆうゆうと三輪車にのっている場合がある　・体どういうことかとよくまわりを調べてみると、ごく近いところに彼と家族関係、あるいは集団内で主従関係にあるボスのみはりがある　ボスの権利で支配下のものに遊具を貸している時は、使用している子どもがいかに下位の子どもであっても、他の子どもは手出しがならず、みはりのボスがいなくなるときを待ち、見守るだけである　このような集団内の順位関係がどのようにしてできるのかよくわからないが、動物の社会におもしろい例がある　子ウサギの社会では少年期になると激しくかみあって順位を決定する　サルの場合はかみあう、ひっかくなどの実力行使は下等なこととばかり、あまりやらないそうである。彼らは遊びの中から自然に互の実力を知るということである。そして母親の七ひかりなども順位関係に重要な要素となるそうである。幼児の場合も争ってみて順位も決めることは殆んどなく、毎日の生活の中で互に実力をみとめるようである。その要素となるものは、保育年数・年令・性別・容姿・体力・知識・技能・親の七ひかりと保母の態度などが考えられる。これらの順位関係は社会の平和を保ち、それによって子どもたちは楽しく遊んでいるようにみえるが、それは表面的なものであり、実は先程述べたように使いたい遊具も順位のためあきらめている場合が多い。また逆にボス的存在の子どもは、支配下の子どもを増すためには一生懸命世話をする。人より早く遊具をみつけて貸してやったり、その子がこまっていることを、代りに保母に伝えてやったりする。しかしボスの地位が安定したとみるや、こんどはいばりすぎ、ともすれば横暴になる。逆に、他に強力なボスが出現したりして自分の地位が危くなると、一生懸命で地位を守ろうとするが、もうだめと察するとその集団からはなれてしまい淋しく無気力になる。ものごとは、なげやりになり、幼稚園にあきてくる、或いは、始めから集団には入れない子どももいる。同じテーブルに座っているから一見仲間のようであってもそうでない場合がある。どれもこれも保母にとって困る問題である　しかしここで考えねばならないのは、保母にとって困る問題が幼児にとってかならずしもマイナスになる問題とはかぎらない

　またたとえマイナスになる問題だったとしても幼児の成長発達の途上どうしても通らねばならない過程かも知れない。先程の問

題にしてみても、ボスがいつまでも同じボスでつづくのではなく、順位も決して固定化したものではない　運動場では第一のボスも室内一斉保育の集団ではボスでないかも知れない　ブランコ集団では順位第一位の子どももママゴト集団では低い順位にあるかも知れない　すなわち幼児の集団組成は場所・時・遊びなどによって常に動いているからである　ボスになったからといって心配するにはおよばない　彼には統率力が養われるであろう　支配下におかれた子どもには協調性が養われるであろう　集団からはみだした子どもは我がままの通らない社会を知るかもしれない　そして幼児はまた適当にその地位を交代する　しかしたからといって保母は放任していいというのではない　保母には、すべての子どもが統率性も協調性も平等に養われるよう助成しなければならない大事な仕事がある　集団からはみだしてひとりでは立ちなおれない子どももある　問題の中には急いで解決しなければならないものもあり、一時そのままにしておいた方がいいものもある　保母はこのような幼児の行動をあわてないで正しく判断しなければならない　広い視界に立って、幼児の成長発達をながい目でみなければならないと思う　最近こんな話をきいた　幼稚園から、どうも口かずが少ないから児童相談所へいって異常性格かどうかみてもらうよう通知があり、思いがけないことで親子とも涙を流してガッカリしてしまったというのである。児童相談所に対する多少の偏見は改めるべきであるが、問題行動にもテスト、有名小学校入学準備にもテスト、幼稚園入園にもテスト、テストの内容にもよるが、こんなにまで、テストに頼らねばならないものであろうか　テストの結果がよくなくては困るのでテストの練習をするところもあるようだ。

幼児教育が著しい発展を示し世の中の関心も高まってきた今日、保育者の態度はこれでいいのだろうか　人間を、いや常に成長し変化しつつある幼児を何かの尺度で計らねば安心できないといえばまたしも、いいかえれば尺度で計ったからもう安心ということになりかねない。たいへんなことである　問題児はこんな行動をするものであるから、この子は問題児だとする考え方が現在多い。問題児を論ずる前に我々はもっと普通児の自然の姿を知るべきである　結論はすでに述べたように、自然の姿でいる幼児を常に観察しなければならないということである　保育者も保護者も、幼児を観察する自分自身の目にもっと自信をもちたいものである

＊　＊　＊